

日本語と韓国語の数量を表す表現について*

— 『交隣須知』を中心にして—

齊藤明美**

〈要旨〉

本稿は、江戸時代から明治期にかけて日本で最も広く用いられた韓国語の学習書である『交隣須知』を中心に、日本語と韓国語の数量を表す表現を検討することによって、日本語と韓国語の数詞の連体的用法と連用的用法(副詞的用法)について言及したものである。調査の結果、連体的用法については、日本語においては「数詞+助詞(の)+名詞」の形式が多くみられ、現代語と同じように用いられていることがわかった。しかし、韓国語においては、語順は日本語と同じであるが、数詞と名詞の間に助詞を伴わない用例が多くみられた。また、連用的用法(副詞的用法)については、濱田敦(1970)が、『捷解新語』の用例をあげて指摘した「韓国語の数詞は、日本語の数詞に比べて名詞的な性格が強い」という点について調査した。その結果、『交隣須知』の日本語では「数詞+用言」となっているが、韓国語では「数詞+助詞+用言」となっている用例と、日本語も韓国語も助詞を伴わない用例がみられた。また、資料によっても表記の仕方に違いがみられた。そして、『捷解新語』においては、概ね日本語の数詞は副詞的な性格が強く、韓国語の数詞は日本語の数詞に比べて名詞的な性格が強い、という濱田敦の主張と同様の結論を得た。

論文分野：日本語学一般, 対照研究

キーワード：日本語, 韓国語, 数詞, 数量詞, 交隣須知

1. はじめに

日本語においても韓国語においても、8個、五冊、6回、2番目のような数量や順序の概念を表す表現があるが、日本語においては、品詞分類の仕方においても今だに多くの問題を残している¹⁾のが現状である。例えば「五冊」を例にあげると、現在の学校文法においては、「五冊」は「数詞」(数名詞)と言い、独立した一品詞ではなく、名詞の一つとしている²⁾。また、「五冊」の「冊」は助数詞とし、数量を表す語に添える接尾辞として扱っている。しかし、生成文法の立場では、「五冊」の「五」の部分「数詞」と呼び、「五冊」を「数量詞」と呼んでいる。³⁾

* この論文は 2008年 政府(教育과학기술部)の 財源として 한국학술진흥재단의 支援을 받아 수행된 연구임 (KRF-2008-321-A00067)

** 한림대학교 일본학과 교수, 일본어학

1) 沖久雄(1986, p.15)によると、「5本」の「5」は、「『本数詞』『数詞語幹』『基本数』『数を表す語』『狭義の数詞』等、様々な名称で呼ばれている。」とある。

2) 本稿では、学校文法に基づき、「数詞」「序数詞」という用語を用いることにする。

3) 沖久雄(1986)pp.15-16参照。

一方、『한국어의 탐구와 이해(韓国語の探求と理解)』によると、韓国の学校文法の品詞分類は、体言(名詞、代名詞、数詞)、冠形語(助詞)、用言(動詞、形容詞)、修飾言(冠形詞、副詞)、独立言(感嘆詞)となっており⁴⁾、体言の中に名詞、代名詞、数詞が含まれていることがわかる。

尚、沖久雄(1986)を参考にして、数量や度数の概念を表す表現を用いた例文をあげると次のようになる。(韓国語訳は筆者)

- ① あした9時に会いましょう。
(내일 9시에 만납니다.)
- ② 本を3冊買いました。
(책을 3권 샀습니다.)
- ③ 5回も電話した。
(다섯 번이나 전화했다.)
- ④ 3人の学生が泊っていった。
(3명의 학생이 숙박해 갔다. 학생 3명이 숙박해 갔다.)
- ⑤ 集めたアンケートは全部で100枚です。
(모은 앙케이트는 전부 100장입니다.)

このような例文の用法については、沖久雄(1986, p.16)に詳しいが、①の「9時」は、時格の成分、②の「3冊」は、数量を表す副詞的な連用修飾成分、③の「5回」は、度数を表す連用修飾成分、④の「3人」は、名詞句を構成する連体修飾成分、⑤の「100枚」は述語の成分を構成しており、さまざまな用法があることがわかる。また、④の韓国語は、現代語においては、状況によっても異なるが、「3명의 학생이 숙박해 갔다」より「학생 3명이 숙박해 갔다」の方がより自然に感じられるのではないかと思われる。

『국어문법(国語文法)』(1996)⁵⁾では、「韓国語の数詞が数量語として体言を限定する用法」について述べており、第1類型(数量語+名詞)と第2類型(名詞+数量語)に分類して説明した後、現代韓国語においては、「다섯 명의 학생(5人の学生)」より、「학생 두 명, 학생 둘(学生2人)」のように、数量語が被修飾語の後ろにくるのが自然である、と述べている(pp.525-526参照)。

また、『한국어의언어』(1999)では、現代韓国語の数詞の用法を、次の①~④に分類している。

- ①名詞-数詞: 학생 셋이 찾아왔다.
- ②名詞-数詞-分類詞: 학생 세 명이 찾아왔다.
- ③数詞-名詞: 세 학생이 찾아왔다.
- ④数詞-分類詞-의(の)-名詞: 세 명의 학생이 찾아왔다.

そこで、本稿は、江戸時代(1603~1867)から明治時代(1868~1912)にかけて日本で最も広く用いられた韓国語学習書である『交隣須知』⁶⁾を中心とする言語資料を調査することにより、前述した①~⑤の例文

4) 정경일 최경봉 김무림他(2000)『한국어의 탐구와 이해』박이정 p.102参照

5) 서정수(1996)『국어문법(国語文法)』한양대학교출판원

6) 『交隣須知』は、雨森芳洲によって作成されたとされる江戸時代から明治期にかけて日本で最も広く用いら

のうち、②の連用的用法(副詞的用法)と、④の連体的用法(数詞+名詞)について言及していくことにする。ここで②と④を選んだ理由は、他の用法に比べて日本語と韓国語の異なった性格が表れやすいと考えたからである。このような研究をすることによって、『交隣須知』を中心とする江戸時代から明治期にかけて作成された韓国語学習書にみられる、日本語と韓国語の数詞の用法の特色を明らかにしようとするものである。(尚、必要に応じて『捷解新語』や明治37年本『交隣須知』の作成に関わった前間恭作によって書かれた『韓語通』の用例についても検討していくことにする⁷⁾。)

2. 日本語の数量や順序の概念を表す表現の品詞分類について

日本語の歴史を振り返ってみると、『数詞』という名称は、「蘭文典の翻訳から始まり、その後英文典の影響による『数量詞』『数形容詞』などの名称を経て、大槻文彦『広日本文典』(1897)の普及以降に定着した⁸⁾ようである。江戸時代には、「数詞」を一品詞とした文法書もあったが、明治時代になると、一品詞とはしないで、名詞あるいは形容詞の一部とするものが多かった。

表1. 数詞の品詞分類

一品詞とせず名詞の一つとしている文法書	一つの品詞とする文法書
『小学日本文典』(1874)田中義廉	『日本文法学概論』(1936)山田孝雄
『語法指南』(1889)大槻文彦	
『広日本文典』(1897)大槻文彦	

表1をみると、昭和(1926~1989)になっても山田孝雄の『日本文法学概論』のように「数詞」を一つの独立した品詞であるとする文法書もあるが、やはり、名詞の一種とするものが多かったことがわかる。

また、『精選版日本国語大辞典』(2001)には、次のようにある。

〈数詞〉

(名)体言の一つ。数によって、数量や順序を表すもの。助数詞を伴うこともある。「一(いち)、二つ、三本、四個、五キロ」のように数や事物の数量を表すものを基数詞、「第二、三つ目」のように事物の順序を表すものを序数詞、順序数詞という。基数詞の中に「二倍」のように倍数を表す倍数詞、「三分

れた韓国語学習書である。本書は、会話体で書かれており、約200年にも渡る日本語と韓国語をみることが出来る貴重な言語資料である。『交隣須知』の諸本には、古写本系『交隣須知』一京都大学本、沈寿官本(文政本、1813・天保本、1842)、アストン本、増補本系『交隣須知』一ソウル大学本(1868-1873)、済州本(1880)、中村本、小田本(1795)、白水本、アストン本(1842、1846)、長崎大学本(1873)、刊本一明治14年本(1881)、明治16年本(1883)、明治37年本(1904)、宝迫本(1883)等がある。

7) 『捷解新語』は、康遇聖によって作成された、朝鮮司訳院において日本語通訳養成のために使われた日本語学習書であり、対話文や侯体の書簡文が収められている。『捷解新語』の諸本には、原刊本(1676年)、改修本(1748年)、重刊本(1781年)がある。前間恭作(1909)『韓語通』は、日本人のための韓国語学習書である。

8) 『新版日本語教育事典』(2005)大修館書店 pp.265-266参照

の一」のように分数を表す部分数詞を立てることもある。また、日本語では、基数詞には副詞的用法もある。ふつうには独立した一品詞としないで、名詞の一つとして説かれることが多い。数名詞。

『精選版日本国語大辞典』は、現在日本で最も広く使われている国語辞典の一つであり、一般的には学校文法においてもこれと同様に考えられている。これをみると、数によって数量や順序を表すものを「数詞」とし「数詞」には、「基数詞」と「序数詞、順序数詞」があり、名詞の一つとして扱われていることがわかる。また、『精選版日本国語大辞典』には「数量詞」という見出し語はみられない。しかし、『新版日本語教育事典』(2006)には、見出し語に、「数詞」と「数量詞」があり、次のような記述がみられる。

〈数詞〉

数量や順序を表す語を数詞という。「一から始める」の「一」のように、数の概念を表す語だけで用いることもあるが、日本語の場合多くは、「数の概念を表す語(本数詞)+数えられる対象の種類を表す語(助数詞)」のかたちで用いられる。「ひとり・ふつか・みっつ・四枚・五台・六本・七回・八匹・九件・十羽」などのように個数・数量・度数を表すものを基数詞、「第一・二等・三着・四番・五代・六級・七版・八段・九番地・十位」などのように順序・位置づけを表すものを序数詞(順序数詞)と呼び分ける場合もある。また、「いくつ・何日・何番」などのように不定の数を表す場合も数詞に含めるのが普通である。(pp.264-265)

〈数量詞〉

「5冊」や「50ページ」のような数量詞は「xの本を読んだ」や「本をx読んだ」のxの位置に現れる。前者を連体用法の数量詞、後者を連用用法の数量詞と呼ぶ。(pp.85-86)

3. 数詞の連体的用法

ここでは、まず『交隣須知』について述べ、続いて『捷解新語』『韓語通』の用例をあげる。

3.1. 『交隣須知』諸本にみられる数詞の連体的用法

明治37年本『交隣須知』を中心に、明治14年本『交隣須知』、京都大学本『交隣須知』、ソウル大学本『交隣須知』、白水本『交隣須知』等にみられる用例をみていく。

① 旱 ㅁ물어서 곡식이 다 ㅁ르라다가 흐로 비에 다 살아 났고나. (明治37年本 天文)

旱りで作物が皆枯れかけてたが一日の雨ですっかり生き上がった。

旱 ㅁ무니 곡식이 다 ㅁ르라다가 흐로 비에 살아 나니 과연기묘허외다.

日デリデ穀物ガ皆カレントシタニ一日ノ雨デ生き出テマコトニスグレマシタ

(明治14年本 卷一 天文)

루 곰으니 곡식이 다 물랏더니 비가 오니 흐르 스이라도 과연 기특^ㅎ의.

ヒデリデ穀食カミナカレソウニアッタニ雨ガフッテ一日ノアイダデモマコトニキトクニゴザル
(京都大学本 卷一 天文)

루 마므니 곡식이 다 물나가더니 비가 오니 흐르 스이라도 과연 기특^ㅎ의.

ヒデリガシテコクモツガ皆カレマシタニ雨ガフッテ一夜ノアイダニキドクニゴザル
(白水本 卷一 天文)

②烏 가마귀는 열두 가지 소리를 흐다 ^ㅎ오.(明治37年本 飛禽)

烏は十二とほりの声を出すといひます。

烏 가마귀는 열두 가지 소리를 흐다 허옵네.(明治14年本 卷一 羽族)

____ハ十二色ノ声ヲスルト云ヒマス

烏 가마귀는 열두 가지 소리를 흐다 허옵네.(京都大学本 卷一 飛禽)

カラスガ十二イロノコエヲシマスル

烏 가마귀는 열두 가지 소리를 흐다 허옵네.(白水本 卷一 羽族)

カラスハ十二イロノ声ヲシマスル

③雙駕馬 쌍가마는 이품 관원이 트시느니라.(明治37年本 車馬)

雙駕馬は二品の役人が乗られる。

雙駕馬 쌍가마는 이품 관원이 트시느니라.(明治14年本 卷三 車輪)

____ハ二品ノ地頭ガオノリナサル

(京都大学本には類似した用例がみられない)

(ソウル大学本には類似した用例がみられない)

④安 호로를 편안히 지내는 거시 호룻날 복이라 호옵는다.(明治37年本 車體)

一日でも樂に暮らすというのはその日一日の仕合せなのでございます。

(明治14年本には類似した用例がみられない)

(京都大学本には類似した用例がみられない)

(ソウル大学本には類似した用例がみられない)

⑤洞簫 통소 소리는 본데 슬푸기에 츄나라 팔천 데즈 그 소리를 듯고 훗터졌다 호옵는다

洞簫の音は一体あはれなものであるから楚の国の八千ノ子弟がこの音をきいて散じてしまつたといふことでございます。
(明治37年本 風樂)

洞簫 통소소리는 본데 슬푸기에 츄나라 팔천 데즈 그소리 듯고 훗터졌다허옵네

ノ音ハ本本トモノアワレナユエ楚ノ八千ノ子弟ガ其声ヲキイテチリヂリニナツタト云ヒマス
(明治14年本 卷三 風物)

洞簫 통소소리 본데 슬푸기에 츄나라 팔천 체즈 그소수를 듯고 훗터진다 허옵네

ヨコフエノコエハ本本トモノアワレナユエ楚ノ八千ノ子弟ガ其声ヲキイテチリヂリニナツタト申マスル
(京都大学本 卷三 風物)

洞簫 통소소리는 본뜻 슬프기에 초나라 팔천 데즈 그소리를 듣고 훗터진다흐옵너

ヨコブエノ音ハ本モノアワレナユエ楚国ノ八千ノ子弟其声ニキイテチリヂリニナツタト申マ
スル (ソウル大学本 卷三 風物)

以上であるが、明治37年本『交隣須知』、明治14年本『交隣須知』、京都大学本『交隣須知』の①~⑤の用例をまとめると、表2. 表3. 表4.のようになる。

表2. 明治37年本『交隣須知』の用例

	日本語	韓国語
①	一日の雨	하루 비
②	十二とほりの声	열두 가지 소리
③	二品の役人	이품 관원
④	一日の仕合せ	하루 날 복
⑤	八千ノ子弟	팔천 데즈

表2. をみると、日本語の①~⑤の用例は、全て「数詞+助詞(の・ノ)+名詞」になっていて、現在使用されている日本語と同様の自然なことばになっている。一方、韓国語は、語順は日本語と同じであるが、日本語の助詞「の・ノ」に当ることばがみられないことがわかる。

次に、明治14年本『交隣須知』にみられる①~⑤の用例をまとめると、表3.のようになる。

表3. 明治14年本『交隣須知』の用例

	日本語	韓国語
①	一日ノ雨	하루 비
②	十二イロノコエ	열두 가지 소리
③	二品ノ地頭	이품 관원
④	(なし)	(なし)
⑤	八千ノ子弟	팔천 데즈

表3.においても、表2.と同じように、日本語が全て「数詞+助詞(の・ノ)+名詞」の形になっている自然な日本語であるのに対して、韓国語は、日本語の助詞「の・ノ」に当ることばがみられない形になっていることがわかる。

次に、京都大学本『交隣須知』の用例を表4.にまとめると、次のようになる。

表4. 京都大学本『交隣須知』の用例

	日本語	韓国語
①	一日ノアイダ	하루 스이
②	十二イロノコエ	열두 가지 소리
③	(なし)	(なし)
④	(なし)	(なし)
⑤	八千ノ子弟	팔천 체즈

表4.1においても、やはり、日本語の用例が「数量詞+助詞(ノ)+名詞」となっており、自然な日本語で書かれているのに対して、韓国語の用例には、日本語の「ノ」に該当する助詞がみられない形になっていることがわかる。⁹⁾

次に、『交隣須知』よりもさらに古い資料である『捷解新語』にみられる用例をみていくことにする。

3.2. 『捷解新語』にみられる数詞の連体的用法

『捷解新語』には、次のような用例がみられる。

- ① 書契에 흐 즈 어근나미 이셔도
 ごしよかんにいちじのちがいがあつても (改修本 一 26)
 書契에 흐 즈 어근나미 이셔도
 ごしよけいにいちじのちがいがあつても (重刊本 一 23ウ)

これらの用例をみると、『捷解新語』の改修本、重刊本の日本語においては、「いちじのちがいて」というように、数詞が助詞「の」を伴った形になっていることがわかる。一方、韓国語をみると、「흐즈 어근나미 이셔도」となっていて、数詞が助詞を伴わない形になっていることがわかる。

- ② 두 슌 편지를
りやうどのごちやう (改修本 十 中3ウ)
 두 슌 편지를
りやうどのごちやう (重刊本 十 中2ウ)

この用例は、日本語においては、数詞の後に助詞「の」があるが、改修本、重刊本の韓国語においては、数詞の後に助詞を伴わない形になっていることがわかる。

9) ソウル大学本『交隣須知』、白水本『交隣須知』については、用例数が少ないので表の作成は割愛した。

3.3. 『韓語通』(1909)にみられる数詞の連体的用法

また、明治37年本『交隣須知』の作者である、前間恭作が作成した『韓語通』(1909 p.45)には次のような用例がある。

表5. 『韓語通』にみられる日本語と韓国語の数詞の連体的用法

	日本語	韓国語
①	一冊の本	한 권 책
②	二匹の牛	두 마리 소
③	三疋の木綿	세 필 무명

表5をみると、『韓語通』にみられる「一冊の本」「二匹の牛」「三疋の木綿」についても日本語には、助詞「の」があるが、韓国語には日本語の助詞に当ることばがみられないことがわかる。

以上のように、明治37年本『交隣須知』、明治14年本『交隣須知』、京都大学本『交隣須知』、『捷解新語』(改修本、重刊本)、『韓語通』等の日本語の数詞の連体的用法については、現代日本語と同様であり、自然な日本語になっていると思われるが、韓国語については、語順は日本語と同じであるが、助詞「の・ノ」に当ることばがみられない用例が多くみられることが明らかになった。

4. 数詞の連用的用法(副詞的用法)

次に、数詞の連用的用法(副詞的用法)についてみていくことにする。

『新版日本語教育事典』(2006)に次のような記述がある。

〈数詞〉

たとえば、「昨日」には、「桜が昨日咲いた」のような副詞的用法がある。それと同様に、数詞「三個」にも、「柿が三個実った」「柿を三個もらった」のような副詞的(連用修飾)用法がある。これらは、「三個の柿が実った」「三個の柿をもらった」のような名詞的(連体修飾)用法と意味的に近い。このような現象を「数理的遊離」と呼び、以前から生成変形文法の考え方に基づいて議論されることが多い。数理的遊離は、先行する名詞(上の例では「柿」)が、主格・目的格の場合に起こるとされ、他の格では(中略)意味が異なる。(p. 266)

〈数量詞〉

「5冊」や「50ページ」のような数量詞は「xの本を読んだ」や「本をx読んだ」のxの位置に現れる。前者を連体用法の数量詞、後者を連用用法の数量詞と呼ぶ。数量詞はつねに両用法をもつとは限らない。(中略)連体用法と連用用法のうち一方だけが適格な文になる例があったり、両用法ともに適格な

文でも両者の表す数量的側面が異なる場合がある。したがって、連体用法の数量詞と連用用法の数量詞は、それぞれが表す数量に違いがあると考える必要が出てくる。(pp.85-86)

これは、日本語の数詞が助詞を伴わずに単独で副詞的に用いられる用法に関する記述であるが、「数詞」においても、「数量詞」においても副詞的な用法に注目していることがわかる。そこで、ここでは、『捷解新語』の用例をあげて、日本語と韓国語の「数詞」について述べている濱田敦(1970)に基づいて、『交隣須知』及び『捷解新語』等にみられる日本語と韓国語の「数詞」の連用的(副詞的)用法について述べていく。

4.1. 『交隣須知』諸本にみられる数詞の連用的用法(副詞的用法)

4.2. 先行研究

濱田敦(1970)は、『捷解新語』の用例をあげ、日本語と韓国語の数詞に関して次のように述べている。

(用例)

빅 흥 칩이 떠뎨스오니

ふねいつそうがおくれまるしたほどに (原刊本 — 11ウ)

빅 흥 칩이 셔절스오니

ふねがいつそうおくれまるしたほどに (改修本 — 16)

ここで問題としたいのは、原刊本の「船一艘が」が、改修本では「船が一艘」となっていて、主格助詞と言われる「が」の位置が、名詞「船」の下にあるか、それとも、数詞「一艘」の下にあるか、という違いが見られる、そのことである。(中略)原刊本の「ふねいつそうが」は、日本語としては、いささか「変」と感じられるのに対し、それを、「ふねがいつそう」と改めた、改修本の本文は、正常な日本語として、読むのに抵抗を感じさせないと言ってよい。(中略)日本語では「ふねがいつそう」の形をとるのが普通であるのに対して、朝鮮語では「ふねがいつそうが」に当る形が一般であるとするならば、その両者の違いは、(中略)両言語の数詞と言われるものの性格の違いに帰すべきではないかと思うのである。(中略)朝鮮語の数詞が、もし日本語と異なる点があるとするならば、それは、日本語に比べて、より名詞的性格が強いということであろうと思われる。 (pp.230-234、一線は筆者)

これをみると、助詞を伴う位置によって、日本語と韓国語の数詞の性格を明らかにしていると思われる。

数詞が助詞を伴わずに副詞的用法で用いられる日本語と、助詞を伴ってより名詞的な働きをする韓国語の数詞とは性格が異なる、というのである。そこで、次に、明治37年本『交隣須知』を中心とする『交隣須知』諸本の用例と、『捷解新語』の用例をあげ、「日本語では数詞の後に助詞を伴わないが、韓国語では助詞を伴う用例」「日本語でも韓国語でも数詞の後に助詞を伴わない用例」等についてみていくことにする。

4.3. 明治37年本『交隣須知』において、日本語では数詞の後に助詞を伴わないが韓国語では助詞を伴う用例

- ① 細 마늘거든 돌을 합히여라 (明治37年本 形體)
 細いのは二つ合わせろ。
 細 마늘면 돌을 합히여라 (明治14年本 卷四 太多)
 ___クバフタツヲ合セヨ
 細 마늘기의 돌식 혼디붓치자 (ソウル大学本 卷四 太多)
 ホソイニツキニツヅゝ一所ニツケウ
 細 마늘면 돌히 합히여라
 ホソクハフタツニアワセイ (京都大学本 卷四 太多)
- ② 塊 흔 덩이를 썩려 내여 노하라 (明治37年本 稱量)
 ___一かたまりかいいで出しておけ。
 一塊 흔 덩이가 몇쓴무게나 혼가 무리보와라 (明治14年本 卷三 鞍具)
 ___一カタマリガ何斤オモサルカ聞テミヨ
 一塊 흔 덩이가 몇근무기나 혼고 무리보와라 (ソウル大学本 卷三 鞍具)
 ___一カタマリガ何斤ヲモサルカタツ子テミイ
 一塊 흔 덩이가 몇근 무기나 혼고 무리보와라 (京都大学本 卷三 鞍具)
 ___ヒトカタマリガナンキンヲモサルカタツ子テミヨウ
- ③ 雙 쌍을 지여 가는 모양이 보기에 듯스외다 (明治37年本 稱量)
 ___二つならんで行く様子は綺麗でございます。
 雙 쌍이 맞거든 돌식 세여라 (明治14年本 卷四 太多)
 ___ツガイガアウタラバニツヅゝカゾヘヨ
 雙 쌍이 맞거든 돌식 여여라 (ソウル大学本 卷四 太多)
 ___ツガイガヲゝタラバニツヅゝカゾヘイ
 雙 삼이 맞거든 돌식 헤여라 (京都大学本 卷四 太多)
 ___ツガイガヲゝタ라ハニツゝゝカソエイ
- ④ 竹 대는 두 가지가 잇는디 (後略) (明治37年本 草卉)
 竹は二色あるが (後略)
 竹 대는 두 가지 이쓰니 (後略) (明治14年本 卷二 樹木)
 ___ハ二種アリテ (後略)
 竹 대는 두 가지 니 (後略) (ソウル大学本 卷二 樹木)
 ___タケハ二色デ
 竹 대는 두 가지 니 (後略) (京都学本 卷二 樹木)
 ___タケハフタイロデ

⑤ 六指 늑손이는 손가락이 하나히 더혀여도 쓸데 업습니다 (明治37年本 疾病)

6本指は指が一本多いのだけれども役にはたちませぬ。

六指 늑손이는 고이히게 싱겟습네 (明治14年本 卷二 疾病)

六ツ指ハアヤシウ生レ付マシタ

六指 늑가락은 괴이히 싱겟습네 (ソウル大学本 卷二 疾病)

六ツユビハフシキニウマレツキマシタ

六指 늑가락은 괴이히 삼겟습네 (京都大学本 卷二 疾病)

ムツユビハフシキニウマレツキマシタ

⑥ 水瑪璃 수만호 서너 냥중을 가져 가시오 (明治37年本 金寶)

「水瑪璃」三四十目持っておいでなさい。

水瑪璃 수만호 서너 냥 가져 가소 (明治14年本 卷三 金寶)

_____ 三四十目トツテユカシヤレヨ

(瑪)瑠 만호 서너 냥 이시니 다 가져가읍소 (ソウル大学本 卷三 金寶)

マンコ三四兩アルニヨリ皆トツテユカレマセイ

瑠瑠 만호 서너 냥 잇더니 가져 가읍소 (京都大学本 卷三 金寶)

マンゴ ゴザルホトニモツテユカシヤレイ

以上であるが、これらの用例を表6. 表7.にまとめると、次のようになる。

表6. 明治37年本『交隣須知』の用例

	日本語	韓国語
①	二つ合わせろ	둘을 합혀라
②	一かたまりかいで	흔 덩이를 썬려
③	二つならんで往く	쌍을 지여 가는
④	二色あるが	두 가지가 잇는디
⑤	一本多いのだけれども	하나히 더혀도
⑥	三四十目持っておいでなさい	서너 냥중을 가져 가시오

表6. をみると、明治37年本『交隣須知』においては、日本語では数詞の後に用言がきて、助詞を伴わないが韓国語では数詞の後に助詞を伴う用例が6例みられたことがわかる。

表7. 明治14年本『交隣須知』の用例

	日本語	韓国語
①	フタツヲ合セヨ	둘을 합히여라
②	(なし)	(なし)
③	(なし)	(なし)
④	二種アリテ	두 가지 이쓰니
⑤	一本多いのだけれども	하나히 더히여도
⑥	三四十目トツテユカシヤレヨ	서너 냥 가져 가소

表7. をみると、明治14年本『交隣須知』においては、「フタツヲ合セヨ、둘을 합히여라」のように、日本語にも韓国語にも、数詞のあとに助詞がみられる用例と、「三四十目トツテユカシヤレヨ、서너 냥 가져 가소」のように、日本語においても韓国語においても、数詞のあとに助詞がない用例もみられることがわかった。①~⑥の用例をみると、明治37年本においては、日本語では数詞の後に助詞を伴わないが韓国語では助詞を伴う用例がみられたのに対して、明治14年本においては、日本語も韓国語も数詞の後に助詞を伴わない用例がある等、資料によって異なっている表現をしていることが明らかになった。

以上のように、『交隣須知』にみられる数詞の連用的用法(副詞的用法)においては、濱田敦(1970)が『捷解新語』の用例を示して指摘しているように、韓国語の数詞は名詞的な性格が強く、日本語の数詞は副詞的な性格が強いと思われる用例も比較的多くみられたが、次の用例のように、日本語も韓国語も数詞の後に助詞を伴わない用例もみられた。

4.4. 日本語でも韓国語でも数詞の後に助詞を伴わない用例

- ① 冶匠 디정장이게 칼 하나 치여 오느라 (明治37年本 人品)

鍛冶やに包丁を一つうたせる。

- 冶匠 디정장이도 잇습네 (明治14年本 卷一 人品)

鍛冶匠モアリマス

- ② 箒 상 쓸게 쓰리뷔 하나 사 오느라 (明治37年本 什物)

庭を掃くのに萩の箒を一つ買ってこい。

- 箒 닙뷔는잇거니와 상쓰는 쓰리뷔나 대뷔나 장만히여라

カヤバウキハアレドモ地ヲハクハギバウキデモ竹バウキデモヨウイセヨ

(明治14年本 卷三 織器)

- 箒 닙뷔는잇거니와 상쓰는 쓰리뷔나 대뷔나 장만히여라

カヤホウキハアレトモ地ヲ掃クハギホウキデモ竹ホウキデモヨウイセイ

(ソウル大学本 卷三 織器)

- ③ 大櫟 대접 흠죽 얻어 주시오 (明治37年本 器皿)

皿を十枚買って下さいまし。

貼匙 접시 대중쇼 각~~ㅎ~~죽 어더주소 (明治14年本 卷三 織器)

皿ヲ大中小各一束求テ下サレヨ

(ソウル大学本においては、類似した用例がみられない。)

これらは、日本語でも韓国語でも数詞の後に助詞を伴わない用例であるが、前述した、日本語では数詞の後に助詞を伴わないが韓国語では助詞を伴う用例と合わせて考えると、同じ明治37年本『交隣須知』においても両方の用法がみられ、どちらか一方だけを用いたということはなかったことがわかる。これは、他の『交隣須知』においても同様である。

次に、『交隣須知』より、さらに古い資料である『捷解新語』にみられる数詞の連用的用法(副詞的用法)の用例をみていくことにする。

4.5. 『捷解新語』にみられる数詞の連用的用法 (副詞的用法)

① 빅 ㅎ 칩이 떠들스오니

ふねいつそうがおくれまるしたほどに (原刊本 一 11ウ)

빅 ㅎ 칩이 써절스오니

ふねがいつそうおくれまるしたほどに (改修本 一 16)

빅 ㅎ 칩 떠들스오니

ふねがいつそうおくれまるしたにより (重刊本 一 15)

この用例は、濱田敦(1970)が指摘した用例である。日本語をみると、原刊本では、「ふねいつそうが」となっていたが、改修本、重刊本で、「ふねがいつそう」と訂正し、より自然な日本語になっていることがわかる。また、韓国語においては、原刊本、改修本で「빅~~ㅎ~~칩이」となっていたが、重刊本では「빅 칩」²と改めており、「이」を削除したことがわかる。。

② 日本빅 두 칩 오느일을

にほんふねにそうまいり申候由 (原刊本 十 18ウ)

日本빅 두 칩 오느일을

にほんふねにそうまいり申候由 (改修本 十 中17ウ)

日本빅 두 칩이 오느일을

にほんふねにそうまいり申候由 (重刊本 十 中13ウ)

これらの用例をみると、原刊本、改修本では、なかった「이」を、重刊本で付け加えていることがわかる。

③ 雞子도 하나히 업고

かいごもひとつなし (原刊本 二 9ウ)

雞子도 하나히 不足호고

たまごもひとつたりませず (改修本 二 13ウ)

雞子도 하나히 足지 못호고

かいごもひとつたりませず (重刊本 二 18ウ)

これらの用例をみると、日本語の数詞「ひとつ」には助詞が付記されていないが、韓国語においては、原刊本、改修本、重刊本が共に「호」としていることがわかる。

④ 건물도 두 가지 업고

ほしものもふたいろすくない (原刊本 二 9ウ)

건물도 두 가지 不足호고

ひものもふたいろたりませず (改修本 二 13)

건물도 두 가지 足지 못호고

ひものもふたいろたりませず (重刊本 二 18ウ)

これは、原刊本、改修本、重刊本ともに日本語においては、数詞が助詞を伴わないが、韓国語では「두 가지」となっており、「호」または、助詞が付記されていないと考えることができる。

以上のように、『交隣須知』や『捷解新語』にみられる数詞の連用修飾的用法(副詞的用法)においては、日本語が「数詞+用言」の形で、数詞が助詞を伴わない、副詞的な用法で用いられている用例が一般的であるのに対して、そこに付記されている韓国語は、「数詞+助詞+用言」と「数詞+用言」の形式があることが明らかになった。また、『捷解新語』においては、原刊本、改修本において助詞が付記されていたが、重刊本で削除した例も1例みられたものの、原刊本、改修本において付記されていなかった助詞を、重刊本で付け加えている例、原刊本、改修本、重刊本ともに、助詞が付記されている例等があり、概ね、日本語の数詞は副詞的性格が強く、韓国語の数詞はどちらかという、日本語の数詞に比べて名詞的な性格が強い、という濱田敦の主張と同様の結論を得た。

5. おわりに

本稿は、江戸時代から明治期にかけて、日本で最も広く用いられた韓国語の学習書である『交隣須知』諸本のうち、最後に作成された、明治37年本『交隣須知』(1904)を中心に、明治14年本『交隣須知』(1881)、京都大学本『交隣須知』等にみられる用例を調査することによって、数詞の連体的用法と連用的用法(副詞的用法)について言及したものである。

まず、連体的用法については、日本語においては、「一日の雨、一日の仕合せ」のように、「数詞+助詞(の)+名詞」のようになっており、現代語とほぼ同じように用いられていることが明らかになった。

しかし、韓国語においては、「十二とほりの声、열두가지 소리」、「二品の役人、이품 관원」「八千ノ子弟、팔천子弟」、「一日の仕合せ、일렛날 복」、「一日の雨、일로 비」等となっており、いずれの場合も語順は日本語と同じであるが、数詞と名詞の間に助詞を伴わない用例が多くみられた。また、『交隣須知』よりもさらに古い資料である、『捷解新語』の原刊本(1676)、改修本(1748)、重刊本(1781)の用例をみると、ここでもやはり「いちじのちがい、일 조 어근나미」、「りやうどのごぢやう、두 숲 편지」等、韓国語では、数詞が助詞を伴わない用例がみられた。これは、明治37年本『交隣須知』の作成に関わった、前間恭作の著書である『韓語通』においても同様であった。「一冊の本、일 권 책」「二匹の牛、두 마리 소」「三疋の木綿、세 필 무명」のような用例がみられ、韓国語の数詞は助詞を伴っていないのである。以上により、当時の日本語の数詞の連体的用法においては、現代日本語と同じように用いられたが、韓国語においては、語順は日本語と同じであるが、数詞と名詞の間に助詞を伴わない形がごく普通に用いられたことが明らかになった。

また、連用的用法(副詞的用法)については、濱田敦(1970)が、『捷解新語』の用例を用いて指摘した、「韓国語の数詞は、日本語の数詞に比べて名詞的な性格が強い」という点について調査した結果、明治37年本『交隣須知』においては、日本語は「数詞+用言」となっているが、韓国語では、「数詞+助詞+用言」となっている用例が比較的多くみられた。しかし、日本語も韓国語も助詞を伴わない用例もみられた。また、明治14年本『交隣須知』においては、韓国語を直訳したような日本語がみられ、資料によって用いることばの用法に少し違いがあることもわかった。また、『交隣須知』より古い資料である『捷解新語』の用例についても調査してみたが、日本語においては、数詞が助詞を伴わない用例が多くみられ、韓国語では、原刊本、改修本においては助詞が付記されていたが、重刊本で削除した例も1例みられたものの、原刊本、改修本においては付記されていなかった助詞を重刊本で付け加えている例や、原刊本、改修本、重刊本ともに、助詞が付記されている例等がみられ、概ね日本語の数詞は副詞的性格が強く、韓国語の数詞は日本語の数詞に比べると名詞的な性格が強い、という濱田敦(1970)と同様の結論を得た。

尚、『交隣須知』や『捷解新語』は外国語学習のための教科書であり、特に会話文を中心としている言語資料であるので、当時の話しことばを比較的忠実に表していると考えられるが、今後はさらに幅広い言語資料を用いて調査していく必要があると考えている。

【参考文献】

- 京都大学文学部国語学国文学研究室編(1966)『交隣須知』京都大学国文学会
 京都大学文学部国語学国文学研究室編(1968)『異本隣語大方・交隣須知』京都大学国文学会
 濱田敦(1970)『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
 京都大学国文学会編(1973)『三本対照 捷解新語 積文 索引 解題編』
 京都大学国文学会編(1987)『改修捷解新語 本文 国語 索引』
 沖久雄(1986)「数詞・助数詞の文法」『日本語学』8月号 明治書院
 福島邦道・岡上登喜男編(1990)『明治14年版 交隣須知 本文及び総索引 [索引篇] 笠間索引叢刊96』笠間書房
 安田明・鄭光共編(1991)『改修捷解新語 解題 索引 本文』太學社

- 서정수(1996) 『국어문법』 한양대학교출판원
- 이익섭 · 이상억 · 채완(1999) 『한국어의 언어』 신구문화사
- 李基文(2000) 『国語史概説』(改訂版)太学社
- 片茂鎮(2000) 『対馬歴史民俗資料館所蔵 交隣須知 解題・本文・索引(韓日語)』 弘文刊
- 정경일 · 최경봉 · 김무림他(2000) 『한국어의 탐구와 이해』 박이정
- 小学館国語辞典編集部(2007) 『精選版日本国語大辞典』 小学館 電子辞書
- 오만(2002) 『고도대학본 『交隣須知』의 어휘 연구』 경상대학교 대학원 박사학위논문
- 高橋敬一 · 不破浩子 · 若木太一編(2003) 『『交隣須知』 本文及び索引』 和泉書院
- 정경일 · 최경봉 · 김무림他(2003) 『한국어의 탐구와 이해』 박이정
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』 大修館
- 交隣須知(ソウル大学本)卷二・三・四, 中村庄次郎伝本, 前間恭作模寫, ソウル大学校中央図書館所蔵
- 交隣須知(白水本) 卷一, 白水福治伝本, 対馬歴史民俗資料館所蔵

〈 요 지 〉

일본어와 한국어의 수를 나타내는 표현에 대하여
- 『교린수지』를 중심으로 -

본고는 에도시대부터 메이지시대에 걸쳐 일본에서 가장 널리 사용된 한국어 학습서인 「교린수지」를 중심으로 일본어와 한국어의 수를 나타내는 다양한 표현 중에서 일본어와 한국어의 수사의 연체적 용법과 연용적 용법에 대하여 언급한 것이다. 조사의 결과 수사의 연체적 용법에 있어서 일본어에 경우는 현대 일본어와 같은 용법이고 한국어는 어순이 일본어와 같고 조사가 없는 용례를 많이 볼 수 있었다. 또 「첩해신어」의 연용적 용법에 있어서는 하마다 아츠시(1970)의 지적대로 일본어의 수사는 부사적인 성격이 강하고 한국어의 수사는 일본어의 수사에 비해 명사적인 성격이 강하다고 생각되는 예문을 비교적으로 많이 볼 수 있었다.

▣ 사이트 아케미(齊藤明美)

한림대학교 일본학과 교수

saito@hallym.ac.kr

- 投稿日 : 2008年 12月 22日
- 審査開始 : 2009年 1月 16日
- 審査完了 : 2009年 2月 6日